



TITLE:

ノヴコロド原初年代記シノダリ本 における活動体と不活動体の区別 について

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. ノヴコロド原初年代記シノダリ本における活動体と不活動体の区別について. ことばの構造とことばの論理: 山口巖教授停年記念論文集 1998: 35-59

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65836>

RIGHT:

ノヴゴロド原初年代記シノダリ本における 活動体と不活動体の区別について¹

緒 論

§1 周知のように、スラヴ諸語は名詞的变化の形式において、いわゆる活動体と不活動体の区別を有する。その形態的特徴は対格にあり、活動体がこれを生格形と等しくする (GA 形) のに対し、不活動体の場合は主格と同形 (NA 形) である。

この範疇の発生とその後の発達の過程に関する諸家の見解は概ね一致して居り、一応の定説を求めることができる。従って先ずこの見解を中心として、この範疇の成立を歴史的に概観してみようと思う。

§2 この範疇の発生は、少くとも文献以前の時代にさかのぼると考えられるが、その根拠は例えば、*оузьрѣ ісоуса нѣжшта* (*Остромир. ев.*) 等に見られるように、古代スラヴ語で書かれた比較的初期の文献にも、既にこの種の GA 形が認められることである。

しかし乍らこの事実は、この範疇が文献以前の時代に既に存在していたことを意味するものではない。古代スラヴ語期においても、GA 形の存在が、既に活動体という範疇を立て得るほどに十分に体系的であったかどうかは、又別箇の問題とせねばならないであろう。

この発生の時期は明かでないが、バルト諸語にこの範疇が知られていないこと² から推断すれば、少くともバルト・スラヴ共通語期以後、スラヴ諸語の分裂前後に至る時期にこの範疇形成の傾向が生じたことは、異論のないところである³。

§3 初原的にはこの範疇は、e/o 幹男性名詞の、人を表わす名詞 (личное существительное. 指人名詞) という極めて限定された意義を有する語群に発生し、後に活動体名詞に一般化するのであるが、この場合にも単数に限られていた。これが現代ロシア語に見られるように、活動体男性及び女性の複数にも行われるようになったのは、比較的后代のことに属する。

例えば古代ロシア語の初期の文献においても、指人名詞以外の男性活動体名詞は、未だほとんどすべてのものが NA 形を有しておりこの種の名詞に GA 形が一般化する過程が

¹『古代ロシア研究』 第2号 昭和37(1962)年11月 53-95頁。

²André Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves*, t. 2, 1^{ère} partie, Paris 1958, p. 17.

³cf. A. Vaillant, "... mais elle (cette distinction) est déjà presque fixée en vieux slave ..." (*ibid.*) これに対してチエルヌイフの "Таким образом, в древнерусском языке, как и в склонении между 'одушевленными' и 'неодушевленными' существительными." (П. Я. Черных, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1954, p. 164) という記述は、誤りではないが、誤解を招くおそれがある。

一応完成するのは、漸やく 1649 年の *Уложение* に至ってであるといわれる⁴。

複数の場合も同様にして、GA 形が一般化したのは先ず指人名詞においてであり、その後それ以外の活動体名詞に行われるに至ったものと考えられる⁵。指人名詞男性複数に GA 形が使用された最古の例は、14 世紀のモスクワ大公イワン・カリタの書簡においてであると言われる (e.g. *пожаловалъ есмь соколниковъ печерскихъ*)⁶。この種の用例は、僅かながらノヴゴロド年代記にも見出される。これは 17 世紀以降他の活動体名詞の複数にも一般化して行くが、上述の *Уложение* には未だ散発的にしか認められない。

女性名詞複数の場合は男性名詞より更に遅れ、16 世紀に至って初めて GA 形が見出されるが (e.g. *и рабынь научити. Домострой*)、未だ散発的であり、一般化するには猶一世紀を待たねばならなかった。これが活動体名詞一般に波及するのは 17 世紀以降のことである (e.g. *птиць прикормить ... Уложение Алексея Михайловича*)⁷。

§4 さて、この範疇が何故このような発展の経過をたどるに至ったかを論ずるためには、先ずこの範疇の発生の原因を明らかにせねばならないであろう。

一般にこれは音韻変化の結果として生じた、主格形と対格形の形態的一致に起因する、格の混同を回避しようとする作用に基づくと考えられている⁸。この場合、諸家の指摘するようにスラヴ語本来の語序の自由さが、一つの大きな要因であつたろう事は、想像に難くない⁹。

この定式から多くのことが説明される。

その第一は、この範疇が初めに e/o 語幹名詞に発生したことである。音韻変化の結果主格と対格の形態的同一化が生じたのは、先ずこの種の名詞に於いてであつたからである。次に男性名詞にこの範疇が生じていたことである。

第三には、この区別が女性名詞単数形に及ばなかったことである。女性名詞が単数において独自の対格形を保有しているからである。

ここから逆に、女性複数にこの区別が一般化したのは、複数において、主格形と対格形が同形であるためという説明も可能となろう。男性複数の場合も同様であり、主格形と対格形の形態的類似 (-и;-ы) のために、格形の混同が生じたからであると考えられる。事実この種の混同は、年代記にもしばしば認められる現象である (e.g. *на конюси свое:*

⁴ П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 166. この点に関して A. Vaillant の “Et elle s'élargit: d'une part, progressivement et à des dates diverses, les langues slaves assimilent les noms d'animaux aux noms de personnes et transforment le sous-genre personnel en sous-genre animé” (*op. cit.*, p. 17) という指摘はすぐれたものである。

⁵ П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 165.

⁶ П. С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка*, М. 1953, p. 121.

⁷ П. С. Кузнецов, *op. cit.*, p. 121; П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 166.

⁸ П. С. Кузнецов, *op. cit.*, p. 118; A. Meillet, *Le slave commun*, 2^e éd., Paris 1934, p. 405 & seq.; K. Horálek, *Úvod do Studia Slovanských Jazyků*, Praha 1955, p. 165. etc.

⁹ П. С. Кузнецов, *op. cit.*, p. 117; П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 164.

Новг. I лет. стар. изв..)。

§5 このような格形の同一化は、特に活動体名詞に限られるわけのものではない。従って不活動体名詞に GA 形が使用されないことに就いては、何等かの説明が必要とされる。

従来の説に従えば、これは不活動体名詞によって指示される対象が、それ自身行為の主体たり得ないためであるということになる¹⁰。不活動体名詞においては、行為の主体である主格と、行為の対象である対格との相違は、活動体におけるほど重要ではないと言うのである。

この問題は主格の職能とも関連して居り、俄かに何れとも断ずることはできないが、何れにしてもこの見解は、等しく行為の主体たり得る一般活動体名詞に GA 形が使用されることが、常に指人名詞よりも遅れるという事実を説明するものではないように思われるのである。

§6 以上に述べた定説をよく検討して見れば、その他にも種々の問題が存在するように思われる。

例えば定説に従えば、GA 形の出現は主格と対格の混同を避けるためであるから、逆にこのような混同が存在しているものであれば特にそれが男性名詞でなくても構わないはずである。従ってこれが男性名詞において発生したということは、男性名詞にこのような条件が備っていたという極めて偶然的な事情によることになる¹¹。

若しそうとすれば、クズネツォフの指摘するように — これは卓見であるが — 完全な社会的権利を持たない人物を指示する指人名詞にこの区別が一般化するのが、爾余の指人名詞よりも遅いという事実¹²を、どう説明す可きであろうか。クズネツォフは、これを、社会的関係の言語への反映という所から説明しようとする。しかしこれは結果論に過ぎない。

重要なことは、何故このような社会的な関係というが如き言語外的なものが、NA 形及び GA 形という言語手段によって表現されるに至ったかを明らかにすることではなければならない。

この問題は、§5 にも触れたように、一般の活動体名詞に対する GA 形の一般化が、何故指人名詞より遅れるかという問題と密接に関連しているように思われる。

また女性名詞複数にいて GA 形が使用されるようになるのは主格形と対格形が同形 (-ы) であるということからよく説明されるが、何故この現象が類似してはいるが一応別箇の格形を保持してしていた男性名詞複数よりも遅れて現われたかも問題である。

このことから GA 形は、女性名詞よりも男性名詞に現われ易いという本来的な傾向があったのではないかという疑いが生ずる。

¹⁰ A. Meillet, *op. cit.*, p. 406; П. С. Кузнецов, *op. cit.*, p. 117.

¹¹ § 4 e/o 語幹名詞と男性名詞の項参照。

¹² П. С. Кузнецов, *op. cit.*, p. 118.

活動体・不活動体という範疇は、何等かの点で性（及び数）の範疇と関連を有しているように思われて来るのである¹³。

§7 ノヴゴロド原初年代記シノダリ本の言語は、この範疇に関して発達の比較的初期の段階にある。即ち活動体、不活動体の区別は、指人名詞男性の単数においては、相当程度に行われているが、複数においては未だその緒についたところであり、その他の活動体名詞には未だ及んでいない。指人名詞の内部においても、未だ若干の浮動が観察されるのである。

従って、このテキストについて NA 形と GA 形の使用の相違を明らかにすることができれば、この範疇の発生の機構を明らかにする上に、役立つところが尠くないと思われる。この小論の目的もまたこのような所にある。

本 論

I. 名 詞

(1) ノヴゴロド原初年代記シノダリ本¹⁴における両形の使用の概況

§8 前節において、ノヴゴロド原初年代記シノダリ本（以下シノダリ本と略称）の言語は、この範疇の成立に関して、比較的初期の段階に属すると述べたが、分析に当って、先ずその根拠を明らかにしておくことが必要と思われる。

特に断るまでもないことであるが、不活動体名詞は、現代ロシア語に至るまで古来の対格形を保存しているのであるから、ここでは特にとりあげない。ここで問題とするのは名詞の対格形一般ではなく、語彙の意義から「活動体」を指すと考えられるものに限っている。

これらは次の六種に大別される。

- (1) 指人固有名詞（男性のみ）。
- (2) 指人普通名詞（民族名も含む）。
- (3) 指人女性名詞（指人固有名詞及び普通名詞）。
- (4) 指人男性名詞で女性名詞と同じ語尾を有するもの。

このうち(3)は現代ロシア語におけると同様に主格形（-а, -я）と明確に区別される対格

¹³この点に関してポテブニャの鋭い洞察がある。“Многое убеждает в том, что мужской род более благоприятен строгому разграничению этих категорий, чем женский, единственное число более, чем множественное.” (А. А. Потебня, *Из записок по русской грамматике*, М. 1958, p. 40.)

¹⁴テキスト *Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов*, АН СССР, М.—Л. 1950.

形 (-y, -ю) を有し、GA 形の使用は全く認められていない¹⁵。例えば *поя Дмитровъну* (10'-1); *приведе жену из Моравы* (23-8); *поя дъчерь Мьстиславлю* (8-5); *цѣловавъше святую Богородицю* (34-5) etc. 複数形の場合は主格形と対格形は同形であるが、§ 3 にも述べたように、GA 形の使用は未だ全く見うけられない。

例えば *принесе ... дѣвки* (97-3); *жены ... поимаша* (62'-6); *а кого доидеть рука попадѣ ли*, (63-8); *церницѣ ли ...* (63'-7) etc.

また (4) に属するものは、女性名詞と同じく、(-a, -я) の語尾を有する名詞である。これらの名詞は例外なく対格形 (-y, -ю) をとる。従ってこの場合にも GA 形の使用は見られないのである。例えば *убиша ... сынъ его Луготу* (81-3); *позва владыку* (61-4); *поя ... переднюю дружину* (50'-4); *погрѣбоша воеводу* (98-6); *убиша ... меченошю* (102-5) etc.

このような事情から、GA 形と NA 形の使用の区別が問題となるのは、(1) と (2) の名詞に限定される。

§9 これらの名詞群における GA 形と NA 形の使用概況は、以下の表に見られる通りである。

固有名詞の場合、表から明らかなように、圧倒的な部分が GA 形をとっている。ここから固有名詞においては、GA 形の一般化の過程は既にほとんど完成していたと見ることができよう。複数で NA 形をとる例が 1 例存在するが、固有名詞が複数形をとること自身きわめて稀であり、GA 形を取る例が偶々 1 例もないことから、直ちに、これが複数形に GA 形が未だ一般化しなかったためであると断ずるわけにはいかない。この問題については、さらに多くの例を蒐める必要がある。

(1) 固有名詞 ¹⁶			
形	NA	GA	計
単数	8	386	394
複数	1	—	1
計	9	386	395

§10 普通名詞において特徴的なことは、指人名詞を除くその他の活動体名詞が GA 形をとらないことである。

また単数において指人名詞が GA 形をとる傾向は、既に相当程度に進行しており、古形を保つものに比して極めて優勢であるが、複数においては、ようやくその緒についたところであることが表から窺われる。

¹⁵ このほか女性には -(j) i に終る形があったが (cf. A. Vaillant, *op. cit.*, p. 96)、シノダリ本では既に -ja の語尾をとっているように思われる。

例えば *и я княгыню кюр Михайловую* (74-4)。何れにしても現代ロシア語では一般活動体名詞も GA 形をとるにも関わらず、また女性名詞 *лошадь* etc. が主・対格同形であるのに、GA 形をとらないことは、これが独自の対格形を有しているためであるとする説明の反証となろう。

¹⁶ この場合双数形は全く現われていない。

これらのことから、普通名詞において活動体と不活動体を形態的に区別しようとする傾向は、シノダリ本では指人名詞に限られ、しかも複数においては未だ散発的である、と結論づけられる。

双数は元来主格と対格が同形（例 単数主格 мужъ; 双数主対格 мужа）であり、生・所格はこれと異った形

（例 мужу）を有するが、対格としてこの生・所格が代用せられる例は全く認められない。これは双数が漸次廃用に帰しつつあるという事情によるものと推察されるが、双数の意味、及び現代ロシア語に見られるように、双数主対格がその格形の類似からやがて単数生格として意識せられるに至った（例えば два мужа）ということとも関連を有しているのではないかと考えられる。

集合数として表にかかげたものは、例えば гость 「商人」、полонь 「捕虜」等のように形態的には単数であり乍ら、指示する対象は複数であるような一群の名詞である¹⁷。（例えば Гюрги ... новотържць всѣ выправи и гость всѣ цѣль 25'-2; а полонь всѣ отяша 62'-3）この種の名詞は単数名詞と複数名詞の間にあるものと考えられ、これが未だ GA 形をとるに至らなかったことは、GA 形が複수에滲透することが弱かったためであるとして一応説明することもできよう。

しかし乍ら当時の言語意識がこの範疇に関して、かくまで鋭敏であったということには、真に感嘆を禁じ得ないものがある。これを単に主対格の混同の可能性、或いは行為性の低さ（これは厳密には指人名詞には適用できない）というような消極的な理由によって説明し去ることが、果して可能であろうか。そこにより積極的な言語的「価値」の存在を認める可きではないであろうか。重大な疑問の残るところである。

§11 以上の予備調査をまとめれば、次のようになる。

- (1) GA 形は指人固有名詞の単数においては、既に一般化していた。
- (2) (1)に属する名詞の複数に関しては、用例が一例のみであり、何等かの結論を求めることは不可能である。
- (3) 指人普通名詞単数においては、GA 形は相当程度に一般化していたが、なお(1)の場合ほど完全ではない。

¹⁷従ってこれは純粹に語彙的意義に関わるものであり、語構成論的、或いは文法的意味で集合数として立てられるという意味ではない。

(2) 普通名詞					
形	N A		G A		計
数	指人	活動体	指人	活動体	
単 数	53	1	263	—	317
双 数	6	—	—	—	6
複 数	211	11	27	—	249
集合数	40	2	—	—	42
計	310	14	290	—	614

- (4) 或る種の指人普通名詞、即ち形態的には単数形であるが、意義的には複数の対象を指示するものにおいては、未だ NA 形が通則であった。
- (5) 指人名詞複数において GA 形をとるものはきわめて少数であり、この形の使用は未だ複数に及んでいないと考えられる。
- (6) 指人名詞以外の活動体名詞は単複共に GA 形をとることがない。
- (7) 女性指人名詞の単数対格は独自の形を保持しており、複数形においても未だ NA 形を保っている。
- (8) 男性の人物を指示する固有名詞或いは普通名詞で、女性名詞と同じく -а, -я 等に終るものは、何れも独自の対格形をとる。

以上のことから、第一に GA 形は複数より単数に現われ易いということが出来る¹⁸。これは GA 形の有する職能乃至は価値が、何等かの点で、複数という範疇の有する価値と相容れないものを含んでいたからと解される。

結論の第二は、性との関連である。複数においてみられるように、GA 形は女性名詞よりも男性名詞に現われ易く、この傾向は主格と対格を形態的に一応区別している男性名詞をして、主・対格同形であった女性名詞よりも早く GA 形をとらしめるほどに強力であった。

第三の点は、語彙的意義との関連である。GA 形は、指人固有名詞に最も一般化し易く、指人普通名詞・活動体名詞・不活動体名詞の順にこの傾向は弱まっていく。

以上に概括した結果を基に、具体的な例について考察を進めて行くことにする。

(2) 固有名詞

§12 人名を表わす固有名詞が NA 形をとる例は、既に述べたように (§ 9)、極めて稀であり 8 例に留まる。従ってこの種の NA 形は、書写の誤り等の全く偶然的な事情によるものとも考えられよう。しかし実例について見れば、これらの諸例は、1 例をのぞいて、すべて説明語として сынъ を伴う場合に限られているのである。例えば、

а. Присла великий князь Мьстислав Романовиць ис Кыева сынъ свои
Всѣволодъ ... 91'-5

б. Новгородъци же послаша къ Гюргю по сынъ, и дасть имъ опять сынъ
свои Всеволодъ. 95-10

в. и послаша по Гюргя по князя Суждалю, и не иде, нъ посла сынъ свои
Ростислав ... 22-6

¹⁸ § 6 参照。

- г. Идоша людѣ съ посадникомъ и съ Михалкомъ къ Всѣволоду; и прия
е съ великою честию вда имъ сынъ Святославъ; 61-10
- д. Иде Ростислав Смольску и съ княгынею, а сынъ свои Святослав
посади Новѣгородѣ на столѣ... 30'-4
- е. и пояша новгородци у Всѣволода сынъ себе Ярослав. 40'-7
- ж. Того же лѣта присла великий князь Всеволодъ въ Новѣгородъ, река
тако; “въ земли вашей рать ходить, а князь вашъ сынъ мои Свято-
славъ, малъ; а даю вы сынъ свои старейшии Костянтинъ.” 72-8

これらの例において特徴的なことは、「某の息子の誰それを」という場合と異り、「某が己れの息子 (特に名を挙げれば) 誰それを」というように、父と子の関係が明確であり、叙述の焦点はこの関係にあてられていることである。

はじめの場合ならば焦点となっているのは、むしろ人名によって表わされる人物であり、сынъ はこの人物を説明するものにすぎない。

従って、このような関係と GA 形の職能との間には何等かの矛盾があると考えられる。例外は次の 1 例のみである。

- з. Мъстиславъ же и Костянтинъ и два Володимира съ пълкы поидоша
по Гюрги къ Володимирю; и пришьдѣше, стаха под городомъ.¹⁹

86-6

(3) 普通名詞

§13 先ず指人名詞以外の活動体名詞に関しては、単数対格として現われるものは、次の 1 例のみである。

- а. Мѣсяца февраля въ 1 день ...громъ бысть по заутрени, и вси слы-
шаша; и потомъ тѣгда же змѣи видѣша лѣтящъ. 78-9

複数の場合は буволы「水牛、bubalus」97-3; вельблуды「らくだ」97-2; коне「馬」83-2, 100'-4 etc.; куры「雄鶏」74'-3; соболи「てん」52'-8 等がある。これらは一応独自の対格形を有してはいるが、主格との混同はしばしば認められ、коне の場合などは、主格形の кони を代用していることすら見出される(97-2; 128'-3 etc.)。

この外集合数を表わすものとして скотъ「家畜」がある。

¹⁹これは前置詞との結合のためであるとして説明できるのではないと思われる。これについては、Л. А. Булаховский, *Исторический комментарий к русскому литературному языку*, Киев 1958, p. 155 参照。

б. Ходиша новгородъци съ Корелою на Емь, и воеваша землю ихъ и
пожъгоша и скотъ исекоша. 50-4

§14 このような一般の活動体名詞を除いた残りの指人名詞は、便宜上三つのグループに分たれる。

その一は NA 形のみをもって現われるものであり、その二は、GA 形のみをとる名詞である。第三のグループには、GA 形、NA 形の何れをも取り得るものが属する。

§15 第一群に属するものとして、既に述べたように (§ 10) 集合名詞がある。これに属するものとして、гость, полонъ の外に гридь「近衛兵」がある。

а. Въ то же лѣто, на зиму приде Ростиславъ ис Кыева на Луки, и позва
новгородъце на порядъ; огнишане, гридь ... 33'-4

вои「軍勢」、пѣлкъ「軍団」なども、おそらくこれに属せしめることができるのではないと思われる²⁰。

§16 この外、親族関係を表わすものとして、зять「女婿」83'-1; шюринъ「妻の兄弟」116-5; сыновъць「兄弟の息子、甥」28'-2 がある。

これを GA 形のみを以って現われる親族関係を表わす語 отьць「父」141'-3 etc.; стръи「父方のおじ」31-3 と較べれば、その相違は明らかである。親族関係において上位にあるものが GA 形を、下位にあるものが NA 形をとっているのである。これは § 12 の指人固有名詞の結果と一致している。

このような観点からすれば、братъ「兄弟」が両形をとり得るのもまた当然と考えられる。但しこの場合 вънукъ「孫」及び сынъ「息子」が両形をとることについての説明が必要となろう。これについては後に考察するするつもりである (§ 26)。

§17 その他、民族を表わすもの或いは一定地域の住民を表わすものの複数形は若干の例外を除いて、すべて NA 形のみをもって現われる。

例えば Българе「ブルガル人」45'-3; Варягы「ヴァリャーグ人」63-8, 69'-6 etc.; Гръкы「ギリシャ人」2'-10, 69'-6 etc.; Касогы「カソグ人」96-9; Куманы「クマン人」96'-4; куряны「クルスクの住民」19-1; кыяны「キエフの住民」16-9, 16'-6; Ляхы「リャフ人」4-8, 5-2; ладожаны「ラドガの住民」17-2; Луки「ルーキ人(ル

²⁰ 例えば, воинъ「戦士」は, вои に singulatif を表わす接尾辞がついたものであるとみれば, вои は集合名詞とも見られる。пѣлкъ については, 例えば次のような用例がある。

По мнѣ идетъ полкъ со княземъ бѣщисла множество. ПВЛ (И. И. Срезневский, Материалы для словаря древнерусскаго языка., СПб. 1895, т. 2, p. 1747).

キの町の住民)」33'-4, 34-3 etc.; Обезы「アブハジア人」96-9; Прусы「プロシア人 (プスカヤ通りの住人)」²¹ 90'-11; рижане「リガの住人」143'-8; рязанце「リャザンの住民」40'-9; смоляны「スモレンスクの住民」116-8; Татары「タタール人」95'-9, 121'-5 etc.; Таурмены「トルクメン人」95'-10; Тоимокары「トイマ河沿岸地方の住民?」91'-7; Фрягы「フリャグ人」67-8, 68-3; Ясы「オセツト人」96-7; Ятвягы「ヤトヴァグ人」8-4; etc.

これに対して GA 形をとった рушанъ「ルーシの住民 (ルサの住民)」²²(95'-4, 95'-6) が2例ある。

また GA/NA 両形をとるものは новгородцевъ, новгородьць: новгородьце, новгородьце, новгородци etc. 「ノヴゴロドの住民」; новоторжцевъ: новотържъце, новотържъци etc. 「ノヴィ・トルグの住民」; плъсковичъ, псковиць: плъсковиче, плъсковици「プスコフの住民」; Нѣмьць, нѣмьци, Нѣмци「ネメツ人 (ドイツ人?)」である。

これらの例は、語彙の数としては、わずかに4個に過ぎないが、その頻度には単なる偶然以上のものがある。

これら GA 形をとり得るものを、先に挙げた NA 形にのみ現われるものと比較すれば、そこに大きな特徴を認めないわけにはいかない。NA 形をとるものは、何れも年代記者の立場からすれば全く異民族であるか、或いは尠くとも味方ではない人々である。GA 形をとるものは、ネメツ人を除けば、何れも自己の陣営にある人々である。ノヴゴロド人は勿論のことであるが、ノヴィ・トルグ及びプスコフもまた、当時ノヴゴロドの属領、所謂 пригород であった。GA 形をとって現われている рушанъ における「ルーシ」も狭義のルーシ、即ちノヴゴロドの地を指しており、従ってこの場合 рушанъ は новгородцевъ と同義である²³。

ネメツ人が何故 GA 形をとるかについてはよくわからないが、恐らく外国貿易の基地として栄えていたノヴゴロドにおける彼等の商業活動に関係があるのではないかと思われる²⁴。

§18 отрокъ「小姓 (下級従士)」1-3, 62'-2; рабъ「奴隸」85-2; возники「御者」

²¹ この論文を書いていた頃、浅学のために Прусы を「プロシア人」と思い誤っていたが、これはノヴゴロドのプスカヤ通りの住民のことである。この思い間違いはこの後(95'-4)に出てくる рушанъ についても同様であって、これはルーシの住民ではなく、スターラヤ・ルサの住民である。

²² 118-8にもこの形がみえるが、これは рушанъ 4 мужа となっていて、複数の生格ともとることができる。

²³ 前の注を参照。これは「ルーシ」であるとしたのは、完全な誤りであるが、スターラヤ・ルサはノヴゴロドの州領にあった都市であるから、ノヴゴロドの「身内」であったことに、間違いはない。

²⁴ ノヴゴロドにおけるネメツ達の特権待遇は、1189-1199年のノヴゴロドとゴートランド間の条約からも明らかである。cf. Договор Новгорода с готским берегом и с немецкими городами, Памятники русского права, М. 1953, вып. 2, p. 125.

146-10; конюси「馬丁」97'-4; мастера「職人」143'-6, 152'-11²⁵; наймиты「賃金労働者」12'-1; холопы「農奴」97'-4 等は、クズネツォフの謂う「社会的に完全な権利を有しない人物」を表わす名詞 (§ 6) であると考えられる。

§19 以上の外、NA 形をとるものとしては бояры「貴族」9'-7; 69'-8 etc.; гостьбнищи「商人?」83-1; купце「商人」22-10, 33'-5; огнищане「裕福な人?」33'-4; приятели「友人」141'-7; слы「使節」22-2, 22-10 etc.; торговци「商人」164'-13; пруси「プロシア人(プスカヤ通りの住民)」²⁶ がある。これらについては後に扱うことにして、ここでは例外として掲げるに止めておく。

§20 以上に述べたことから、NA 形は次のような語に現われ易かったと結論される。

- (1) 集合名詞。
- (2) 親族関係において下位にある人物を表わす名詞。
- (3) 異民族を表わす複数名詞。
- (4) 社会的に完全な権利を有しない人物を表わす名詞。

§21 GA 形のみに現われる名詞は、既に述べたように (§ 9) その大部分が単数名詞であるが、これには отца, стръ (§ 16) の外、次のようなものが含まれている。

先ず、教会関係の職名、僧侶或いはこれと密接な関係を有する人物を表わす名詞である。

例えば архиепископа「大主教」77-8, 92'-4 etc.; архимандрита「大僧院長(掌院)」167'-4, 167'-10 etc.; иерѣя「司祭」122'-5; попина「教会の長老?」55-4; поповица「僧侶の子」86'-10; митрополита「総主教(府主教)」5'-12; 15'-9; пророка「予言者」145-11; църньця「修道僧(修道士)」122'-5 等である。この外 епископъ「主教」; попъ「僧侶」; игуменъ「僧院長(典院)」も少数の例を除いて GA 形をとっている。

§22 その他の宗教的な語として бога「神」95-4, 150-4; Духа「精霊」141'-3; исповѣдника「迫害を受けた聖人の称」70-2; поборника「擁護者」141-3; поспешника「援護者」88'-11 などがある。пастуха「羊飼」; скопъця「去勢された人(閹人)」5'-4; служителя「召使」もこれに属するのであろう。

²⁵ 152'-11 の例は、из великого Рима от папы мастеръ приведоша нарочить となっており、明らかに GA 形である。これは §23 に述べる一定の職人を表す語の範疇に入るものであると思われる。因みにノヴゴロドでは手工業が発達し、職人は民会に出席する権利を持っていた。したがって「すぐれた」(нарочить) 匠をここに入れたのは誤りである。

²⁶ 前の注参照。

пастуха, служителииは何れも僧侶に対する比喩的な表現であり、скопця²⁷も府主教と同格に使用されているのである。

а. Изволи богъ **служителя** собе и **пастуха** словесныхъ овъчь Новугороду и всѣи области его, и высяя Спиридонъ. 109-5

б. Приведе Янѣка митрополита **скопця**. 5'-12

このような意義を有する語群に GA 形が現われる傾向がきわめて強いことは、複数においてすら、пискуповъ「主教」(144-2)のような形が見られることからもうかがわれる。

§23 以上の外 господина「主人」85-2; королевича「王子」92-5, 92-8; цесаря「皇帝」67-2, 67-9 etc. 等、社会的に身分の比較的高い人物を示す語に GA 形が使用されているが、これは親族関係において上位を占める人物を表わす語に GA 形が使用される傾向があること (§ 16) と、よく一致している。

これに反し、一定の職業に従事する人物を表わす語が、GA 形をとる場合がある。例えば вѣсця「計量師」62-9; котельника「食器製造師 (鍋釜職人)」86'-9; опоньника「幕製造師」86'-9; серебряника「銀細工師」119-2; даньника「収税人」86'-11 などがこれである。

これらは、何れも社会的に特に身分の高い人物を指しているとは考えられない。この限りでは、§ 18 のクズネツォフの定式と矛盾するようにも思われるが、当時の都市における手工業の必要性和その急激な発達を背景として考えれば²⁸、このような今日的な考え方は、事実と異っていたと見なければならぬであろう²⁹。

§24 以上の外、意義的に明確な群化を示さないものとして злодѣя「悪業を為す者」106-9; иноземца「異邦人」148-12; младѣнця「若者」111'-4; мъртвиця「死人」12'-1, 111'-3 etc.; человекa「男」67-6 等がある。

§25 以上から GA 形のみにも現われるものは、

(1) 教会・宗教関係の人物を表わす名詞。

²⁷скопця に対する当時の考え方を窺わしめるものとして、例えば次のような叙述がある。Внидоша **аки скопци свѣтли** со свѣщами ... послание поликарпа. (И. И. Срезневский, *op. cit.*, т. 3, p. 380.)

ここで свѣтли というのは「清純な」「けがれのない」という意味である。

²⁸これについては、Д. С. Лихачев, *Культура русского народа X-XVII вв.*, АН СССР, М.-Л. 1961, p. 12 & seq. 参照。

²⁹プロストランная・руская・браудаにおいて、殺害したときの罰金の額は **холопъ** 及び **рабъ**, **рядовичъ** 等と区別せられ、村の長老 (**сельский тиунъ**) と同額になるように定められている。cf. *Хрестоматия по истории СССР; с древнейших времен до конца VX века*, М. 1960, p. 208.

- (2) 社会的身分の高い人物を示す名詞。
- (3) 一定の職業にたづさわる人を表わす名詞。
- (4) その他。

であると結論される。

§26 GA 形、NA 形の何れにも現われる名詞は、上述のような意義による群化を示さないことが、却ってその特徴をなしている。従ってこの場合、両形の選択は語彙的意義ではなく、統辞論的、或いは文体論的な理由に根ざしていると考えるのが自然である。今比較的頻度の大である **сынъ** について見れば、NA 形は、25 例中 8 例まで、一定の構文中に現われていることが認められる。

例えば、

а. и послаша новгородъци къ Святославу въ Русь по **сынъ**.³⁰ 43-5

この構文は、ノヴゴロド人が民会の決定に従って他のルーシの公の許に公子を、ノヴゴロド公として迎えるために使節を送る場合の常用の表現であるが、そのうち **сына** を使用したものは、1 例に過ぎない。

б. Въ то же лѣто придоша ис Кыева от Всѣволода по брата Святослава вести Кыеву; “а сына моего, рече, примите собе князя”. И яко послаша епископа по **сына** его и много лепших людий ... 21-9

残りの例中更に 8 例は、既に述べたように (§ 12) 固有名詞の NA 形を伴って現われる。

以上の外、厳密に立証することはできないが、NA 形と GA 形とを比較すれば、GA 形は話者の注意が息子そのものに向けられている場合に使用され、注意が父親と息子の関係に向けられているときは、NA 形が使用される傾向があるように感じられる³¹。

в. Выведоша из Новагорода князя Гюргя Андреевиця; а Мьстиславъ **сынъ** свои посади Новгородѣ. 39'-6

г. Тьгда послаша владыку Нифонта съ передьними мужи къ Гюргеви по **сынъ**, и вѣвѣдоша Мьстислава, **сына** Гюргева ... 28-6

及び

³⁰ § 12 例文 3. 及び脚注参照。

³¹ このように考えれば NA 形 **сынъ** が固有名詞と同格に立つ場合 (§ 12) に見られるように、固有名詞に先行しようとする傾向が強いこともよく説明されるように思われる。先行するものは、通常文の直接の成分であり、後に立つ同格名詞はこれを説明するものであって、文の成分としては、間接的であるからである。即ち **сынъ** Святославъ という場合、表現の主眼は、文の直接の成分である **сынъ** (親子関係) にあり、逆の場合には主眼はスヴァトスラフという人物にあると考えられるのである。勿論これには例外もある。

д. Иде Мьстиславъ Киеву на столъ из Новагорода ...а сынъ посади
Новѣгородѣ Всѣволода на столѣ. 9-6

е. а сына его Мьстислава посадиша на столѣ отци. 11-4

における両形の対立を比較して見れば、このことは明らかであろう。

また GA 形をとるものの中には、сына его という句が屢々見られるのに対し、NA 形の場合は 3 例 (81-2; 92-8; 95'-5) を除き、сынъ свои のように、再帰代名詞を使用している (22-6; 22'-2; 30'-3; 39'-6; 72-7; 91'-5; 95-10)。

このほか посадницъ сынъ 「代官の子」という表現が固有名詞を伴わずに見られることがある (109-10, 140'-7) が、これも恐らく上述の場合に属するのであろう。

また「父と子と精霊」という句における「子」は GA 形 сына をもって現われているが (141'-3)、これは「むしろ § 22 に述べた、宗教的な意義を有する語の場合に含める可きであると思われる。

§27 このように NA 形と GA 形の有する価値の相違は、文体論的、或いは統辞論的な使用に影響を及ぼすが、その際、語の意義に微かなニュアンスの相違をもたらす。これが更に進んで、或る場合には、語の意義に、二次的な影響を与えることもある。

мужъ の場合、このような語の意義への影響の度合が比較的強いために、両形の相違は、他の場合よりも明確にとらえられる。NA 形は殆んどの場合、公の家臣を示しているのである。例えば、

а. Почаша мълвити о Сужьдальстѣи воинѣ новгородци и убиша мужъ
свои и съвъргоша и съ моста въ субботу Пянтикостную. 15-1

б. Князь же Гюрги съ нашими мужи мужъ свои присла. 101-1

в. “сыну кланяю ти ся; мужъ мои и гость пусти, а самъ съ Торожъку
пойди, а съ мною любовь възми.” 82'-8

その他 (82'-7; 101-3; 73'-8 etc.) の例もこれに属している。一応例外と見做されるのは、次の例のみである。

г. Къгда бѣше брани быти на поганя, тѣгда ся начаша бити межи
собою; и убиша мужъ прус. 90'-11

これに反し GA 形の場合は 2 例を除いて、すべて特定の個人の特質を述べるために修飾語を伴い、人名と共にこれと同格に立つものとして使用されている。例えば、

д. ...и убиша посадника новгородькаго Иванка, мужа храбра зѣло. 15'-7

その他 архиепископа Нифонта, мужа свята и зѣло боящяся бога (13-7); мужа богомъ избрана Аркадия (29-9); Митрофана, мужа богомъ избрана (61'-2); Арсению ... мужа добра и зѣло боящяся бога (95-4) etc. がある。

この例外となるのは次の 2 例である。

а. “мужа моего пустите, а темъ путь покажите прочь, откуда пришли.”
115'-6

б. “изберѣте от себе мужа такого достоина, а язъ васъ благословляю.”
166'-4

§28 князь は、語の意義から、主として GA 形をとり (§ 23)、NA 形をもって現われるものは僅かに 3 例を数えるのみであるが、このうち 2 例 (38-5; 45-6) は、сынъ の場合と同様に послаша ... по князь という構文に使用されている (§ 26)。

§29 この外、грькы 「ギリシャ人」に対する гръцина (102'-3; 102'-4; 105-4 etc.); смолянны 「スモレンスクの住民」に対する смоляннина (79-9) のように、或る集団の成員を個別的に示す接尾辞 инъ を有する所謂 singulatif³² が常に GA 形を有することを、特に指摘しておきたい。воина 「戦士」(67-6) も恐らくこれに属するものと考えられるが、その場合 вои は所謂 pluralia tantum と考えるべきかもしれない³³。

§30 以上で名詞については、一応検討を終えたことになる。次に問題となるのは代名詞である。以下、これについて、考察を加えて行くことにする。

II. 代名詞

(1) 代名詞における両形の使用の概況

§31 代名詞は、名詞によって指示せられる対象を、その名詞の代りに指示するものであり、従って名詞と極めて密接な関連を有する。ここでは、特に人称代名詞と言われるものを対象として考察するが、その場合、3 人称を表わすものと、1・2 人称の代名詞とは、種々の点で、事情が異っている。先ず 1 人称単数及び 2 人称単数の形 я (азъ), ты の対格形は生格と同形の мене (менѣ), тебе (тебѣ) であり、別形として後倚辞 (enclitique) の мя, тя がある。

³² A. Vaillant, *op. cit.*, t. 2, 1^{ère} partie, p. 308.

³³ И. И. Срезневский は、вои に単複両数あることをあげているが (*op. cit.*, т. 1, pp. 284-285)、A. Meillet は воевати を вои (複数) から派生したと考えている (*Le slave commun*, p. 228)。

実際の使用から見れば、特に単複の区別は明確ではなく、複数とも、単数とも、単数集合名詞とも考えられる (cf. § 15)。

複数の場合も同様にして **мы, вы** の対格形は主格と同形の **намъ, вамъ** であり、後倚辞は **ны, вы** である。再帰代名詞 **себе** (**себѣ**), **ся** もこれに属する。これらの後倚辞も本来はいわゆる *mots tonique* であり³⁴、単数形は印欧語の **mē, *tē, *sē* を *formes toniques* として強化した形 **mē, *tē, *sē* に対格語尾 *-m* を加えて成った **mēm, *tēm, *sēm* にさかのぼると言われる³⁵。複数形も同様にして印欧語の **nōs, *wōs* にさかのぼると考えられている³⁶。従ってこれらは本来対格形であり、同時にスラヴ語においては形式的に主格と同一であるところから³⁷、これを NA 形とすることができると思われる。

これに対して *formes toniques* である **намъ, вамъ** は明らかに GA 形である。

シノダリ本においては、この NA 形、GA 形共に使用頻度は僅少であるが、NA 形が必ずしも前置詞の目的語としてのみ使用されるとも言い切れないこと、NA 形と GA 形の使用頻度に大差はないことから見て、単に音調によって両形の選択が行われたとばかりは言い切れないようにも思われる。

何れにしても 1・2 人称代名詞において、他の名詞に較べて著るしく早い時期から既に GA 形の使用が行われていたことが事実とすれば、これには然る可き理由があったに違いないと思われる。

今、これらの代名詞の使用状況を表によって示せば、次のようになる。

人称代名詞					
数	単数		複数		計
形	NA	GA	NA	GA	
1 人称	7	4	7	17	35
2 人称	2	2	2	2	8
再 帰	1	1	—	—	2
計	10	7	9	19	45

§32 3 人称の人称代名詞は、本来承前代名詞 (*anaphorique*) であり、後倚辞である。このため承前代名詞は主格を欠くが、対格形に倣って主格形を補填している。従って **и, е** なども一種の NA 形と考えることができる³⁸。

この代名詞が 1・2 人称の代名詞と根本的に異なるところは、GA 形の使用に関してである。これを表にして示せば次の如くである。

表に見えるように単数に於いては NA 形の使用の頻度は GA 形に比して遥かに大である。複数の場合は逆に NA 形の使用頻度の割合は、単数におけるほど大きく開いてはいな

3 人称代名詞 (1)						
数	単数		複数		集合数	計
形	NA	GA	NA	GA	NA	
3 人称	121	30	59	34	19	263

³⁴ A. Vaillant, *op. cit.*, t. 2, 2^{me} partie, p. 442.

³⁵ *op. cit.*, p. 445.

³⁶ A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, pp. 335–336.

³⁷ 主格の **vy** は対格を借用したものであり、**my** の場合 **m-* は動詞語尾の影響であり、**-y* は **vy** の影響であると考えられているようである。cf. A. Vaillant, *op. cit.*, t. 2, 2^{me} partie, pp. 451–452; A. Meillet, *Le slave commun*, p. 454; *Introduction*, p. 335.

³⁸ A. Vaillant, *op. cit.*, t. 2, 2^{me} partie, p. 420 & seq.

いように見える。

しかし乍ら、使用頻度を詳しく調べて見れば大略 л. 140 前後を境として分布が大きく異っていることに気付く。今仮に л. 140 を境にして、それ以前と以後のものを別個に集計すれば、次の表が得られる。

即ち л. 140 以前においては単数・複数共に NA 形が GA 形を数において圧倒しているが、л. 140 以後は単数においても GA 形の比重が増加しており、複数に至っては両者の比率が逆転しているのである。

3人称代名詞 (2)						
数	単数		複数		集合数	計
形	NA	GA	NA	GA		
л.140 まで	93	17	52	17	19	198
л.140 以後	28	13	7	17	—	65
計	121	30	59	34	19	263

集合数として示したものは、中性単数形 e であるが、これは複数名詞或いは意味的に複数である人物の集団を指すのに使用されている場合である。

何故中性単数がこのように使用され得るのか、又何故これが GA 形を有しないかも問題であるが、茲では、これが л. 140 以後には現われないことを、特に指摘しておきたい。

その他 л. 140 までは量的に л. 140 以後の約 4.3 倍強であるのに反し、これらの代名詞の出現する頻度は л. 140 までのものの場合 л. 140 以後に較べて 3 倍強に過ぎない。このことは、л. 140 以後にこの種の代名詞が比較的良好に使用される傾向にあったことを物語るものと言えよう。

すべてこれらの事実は大まかに言って л. 140 以後の言語においては、この種の代名詞に対する意識のしかたが、それ以前のものとは大分異っていたことを示すもののように思われる。

このことは л. 119 以後写本の手蹟が変っていることと関連しているかも知れない。その他種々の原因が考えられるであろうが、何れも現在の所推測の域を出ない。

最後にこの代名詞においては、GA 形の一般化の程度は普通名詞 (§ 10) よりも遥かに遅れていることを指摘しておく必要がある。この点に関してこの代名詞は 1・2 人称代名詞と際立った対照を示している。

ここから又、活動体、不活動体という範疇と、人称との関連性が浮び上ってくるのである。

(2) 1・2 人称代名詞

§33 1・2 人称代名詞の場合、§ 31 において触れたように、GA 形と NA 形の対立は必ずしも単なる統辞論的、(或いは音声学的) 理由のみに基づいているとは、考えられない例がある。例えば前置詞の目的語として立つ場合、formes atones である NA 形が常に使用されるとは限らないのである。за мене (149'-7); на насъ (104'-9) etc.; в насъ (122-3); о насъ (132-14); на насъ (97'-3) etc.

実例について見れば、両形の対立はむしろ意味的な要因が強く働いているように思われるのである。GA 形はコンテクストにおいて意味的に重要な語である場合、NA 形は特に強調しない場合、に夫々使用されていると考えられる。例えば、

а. “даже буду виновать, да буду ту мертвъ; буду ли правъ, а ты **мя** оправи, господи”. 90’-6

б. Въ то же лѣто постави **мя** попомъ архепикопъ святыи Нифонтъ. 23’-7

в. “не мислилъ есмь до плъсковичъ груба ничегоже; нъ везлъ есмь былъ въ коробьяхъ дары: паволоки и овощъ, а они **мя** обьщствовали.” 104-9

に対して

а’. Призвавъ брата Исака, егоже слѣпи, посади его на прѣстолѣ, и рече: “даже еси, брат, тако створилъ, прости **мене**, а се твое царство.” 66-6

б’. ...и увѣдавшие черныи люди, погнаша по немъ, и хотѣша на дворъ его, и не да Онанья: “братъе, аже того убиеете, убийте **мене** переже.” 134-6

その他の場合も同様である。

г. Но еще преблагыи, премилостивый человекъколюбець богъ ублюде **ны** и защити от иноплеменник... 126’-2

д. Исаия пророка, глаголюща ... аще ли не хотите, ни послушаете мене, оружие **вы** поясть, и тако пожнетъ единъ 100 васъ ... 145’-2

г’. “...или есте на нас удумали, тѣ мы противу васъ съ святою богородицею и съ поклономъ; то лучше **насъ** исѣчите, а жены и дѣти поемлете собе, а не лучше погании; ...” 105-11

д’. “изберѣте от себе мужа такого достоина, а язъ **васъ** благословляю.” 166’-4

このように両形の使用は formes toniques と formes atones の本来の職能をよく保存しているように思われるが、このような音声学的側面と意味的側面の密接な関連には1・2人称代名詞が原則として直説法に使用されるという特殊な事情が、あづかつて力があつたと

考えられる。

(3) 3人称代名詞

§34 シノダリ本において **и** の使用を見れば、或る種のかなり顕著な傾向が見られるように思われる。

その第一は、或る人物に対しその遺体を指すのに使用されることが多く見受けられることである。

а. ...и ту ся разболе самъ, и воротися опять, и преставися на пути; и везоша **и** Киеву, и положиша **и** о святого Федора. 33'-6

б. “умърль есть; придете и видите **и**.” 68-8

в. Тои же ночи и преставися; и везоша **и** въ Володимиръ, положиша **и** въ манастири ... 139'-11

その他の例は 29-7; 42-3; 43-3; 48'-9; 75-3; 81-3; 88-8; 88-9; 116'-3; 140-3; 150'-7; 162'-3; 163'-5; 164-4; 164'-4; 169-6; 169-8; 169-9 etc. である。

その第二は、何等かの点で敵対する相手に対して使用されることである。例えば、

г. Побѣдиша Всѣслава на Немизѣ. Томъ же лѣтѣ яша **и** на Рши. 4-4

д. ...ту **и** налезоша, испросивъше Половци у Мьстислава, и убиша **и**. 98-7

е. Того же лѣта, еще не дошедшу князю Михаилу до города, яша Игната Бѣска, и биша **и** на вѣчи, и свергоша **и** с моста въ Волховъ: 160'-4

その他の例としては 14-4; 14-7; 15-1; 21'-3; 21'-5; 21'-8; 24'-3; 28-9; 29-6; 31-9; 38-2; 58-4; 73-8; 80'-5; 88-7; 90-8; 103'-6; 110'-5; 113-4; 115'-3; 116-5; 117-8; 124-5; 139'-6; 160'-4; 162-9; 164-8 etc. がある。

第三の点は、或る集団が、集団の意志により何等かの公式な(多くは政治的な)、行動を特定の個人に対してとる場合である。例えば、

ж. и шьдъше всь народъ, пояша **и** из манастиря от святыхъ Богородицы ...и вѣвѣдоша **и**, поручивъше епископю въ дворѣ святыхъ Софие ...

29'-1, 4

з. и всь Новъгородъ, шьдъше, съ честию посадиша **и**, донележе будетъ от митрополита позвание. 61'-3

и. Новгородци же вси съ игумены и со всѣмъ ерѣискимъ чиномъ възлю-
биша богомъ избрана и святою Софьею отца его духовнаго Давыда, и
съ честию посадиша и въ владычни дворѣ ... 155-13

同様の例としては、40-8; 43-6; 46-4; 47-6; 62-3; 76-7; 77-9; 77'-6; 80'-3; 88'-6;
101'-3; 102'-5; 102'-6; 109-7; 134'-8; 147'-2; 147'-11; 150-9; 152-10; 155'-7; 155'-8;
162'-12; 163'-10; 166'-9 etc. がある。

その他、あまり明確には現われないが、目上のものが自己の影響下にある人物に対して
何等かの行為を行う際に и が使われる傾向があるように思われる。例えば、

к. Приславъ Всѣволодъ, выведе Ярослава из Новгорода и веде и къ собе;
61-4

л. и посадиша и въ епископии, ... И иде с передними мужи, прия и съ
любовью князь Святослав и митрополить ... 52-8, 52'-1

類似の例としては、25-9; 48'-7; 65'-8 etc. が挙げられる。

§35 複数の NA 形 я において、最もまとまっているのは、敵対関係にある人物を指示
する場合である。この際何故かわからないが、単数に比べて使用される動詞の種類が、或
る程度限定されてきている。例えば、побѣди я (10'-5, 37-2, 98-4); побѣдиша я
(6'-11; 7'-9; 32'-8); заточи я (10-2); поточи я (75'-1); расточи я (75'-8);
изма я (75'-7); измавъ я (83-1) etc.

その他この類に属するものとして、всади я въ тѣмницю (68-2); исѣкоша я
(53-4); порубиша я (40'-10); избиша я (22'-7) etc. がある。

それ以外の諸例には、特に意義的な群化は認められない。このことは、複数において
は、単数におけるよりも、活動体・不活動体の範疇の影響が未だ少く、系が安定している
ことを示しているためと解釈することができよう。これらの例文中 пустити と共に用い
られるものが若干あることを指摘するだけで充分であろうと思われる。пусти я (9'-8,
40-9); пустиша (49-6); отпусти (1'-6) etc.

§36 3人称代名詞におけるもう一つの大きな特徴は § 32 に集合数として示した中性単数
形 е の使用である。

NA 形をとる複数指人名詞を受ける場合に時にこの形が使用されているのである。これ
は、その使用の頻度及び後述する (§ 38) 形容詞修飾語の場合を考慮すれば、決して単なる
偶然的な誤に帰することはできないように思われる。例えば、

а. На ту же зиму ходи Мьстислав на Половце, и победи е, и приведе
полонъ въ Русьску землю ... 35-8

- б. Идоша людѣ съ посадникомъ и съ Михалкомъ къ Всѣволоду; и прия
е съ великою честью и вда имъ сынъ Святославъ; 61-9
- в. ...они же, дошедъше Русы, въспятишася. Князь же Ярославъ съго-
ни е на Въсвятѣ и навороти на не; 102-2

§37 以上のような NA 形に対して、GA 形の場合には、特に顕著な傾向を認めることはできない。

§38 §36 において述べたことと関連して形容詞修飾語と名詞被修飾語との文法的不一致 (несогласие) が認められる場合についてつけ加えておきたい。

代名詞の場合と同じく、NA 形をとる複数指人名詞を規定す可き形容詞修飾語が、中性単数形をとる若干の場合が見出されるのである。例えば、

- а. Съ же Глѣбъ прѣже прихода ихъ изнарядивъ свое дворяне и бра-
тие и поганыхъ Половчъ множество въ оружии ... 89'-4
- б. О, горѣ тъгда, братѣ, бѣше: дѣти свое даяхуть одѣренъ: 81'-5
- в. "...нъ приходомъ богомъ пущени на холопы и на конюси свое на пога-
ныя Половче ..." 97'-4
- г. Въ то же лѣто, на зиму приде Ростиславъ ис Кыева на Луки, и позва
новгордьце на порядъ; огнищане, гридь, купце вѣчьшее. 33'-5
- д. промѣкла бо ся вѣсть бѣше си въ Пльскове, яко везеть оковы, хотя
ковати вѣчьшее мужи ... 104-7
- е. Цесарь же Мюрчюфолъ крѣпляше бояры и все люди, хотя ту брань
створити съ Фрягы ... 69'-8

結 論

§39 以上具体的な例について細かく立ち入って論じて来たが、これらの用法を通覧するとき、そこにおのづから一つの価値が浮び上って来るのを感じないわけにはいかない。

すべてはただ一つ、個別と聚合の対比を指し示しているからである。

NA 形が対象の聚合性を示すのに対し、GA 形はその個別性を強調する。GA 形はより明確であり、個性的であり、具体的である。NA 形はこれに対してより没個性的、より抽象的であると言うことができよう。

GA 形が先ず指人固有名詞に一般化した (§ 6, § 9) のもこの故であり、単数形に現われ易い (§ 6, § 10, § 11) のも又この為であった。指人名詞以外の一般活動体名詞に拡大することが遅かったこと (§ 10, § 13) も当然と考えられる。

このように個別性の低い一般活動体名詞にこの範疇が滲透するためには、指人名詞における GA 形の一般化と、これに伴う個別性の弱화가前提にならなければならなかったであろう。

シノダリ本において指人名詞の GA 形が教会・宗教関係の人物を表わす語 (§ 21)、神、聖人等宗教的な内容を有するもの (§ 22)、社会的に身分の高い人物を表わす語 (§ 23)、或いは一定の職業に従事する人物を表わす語 (§ 23) 等、一般に何等かの点で他と明確に区別する可き個性を有する語に現われることは、このような GA 形の有する個別性の強調という本来の機能が未だ十分に鮮明であった事を示すが、これらの例は又 GA 形のこのような機能を支えるものが、対象に対する価値の判断であったことを示していると思われる。

ここから指人固有名詞の NA 形 (§ 12)、сынъ と сына の対立 (§ 26)、мужъ と мужа の対立 (§ 27) の如き文体論的使用の可能性も生ずるのである。муж прус (§ 19) における NA 形も、このような観点からすれば、決して例外的な形ではないと考えられる。

逆に новгородцевъ, новоторужцевъ のように自己の陣営に属する住民を示す語が、複数であるにも拘わらず GA 形をとること (§ 17) も、このような価値判断の然らしむる所であろう。

гридь, полонъ 等の集合名詞 (§ 10, § 15)、шюринъ 等、親族関係において下位にある人物を示すもの (§ 16, § 26)、社会的に完全な権利を有しない人物を表わす語 (§ 6, § 18)、異民族をを表わす複数名詞 (§ 17)、その他一般に職業的乃至は身分的な集団を表わす複数名詞 (§ 19)、等が主として NA 形をとることについては、最早一々説明するまでもないことであろう。

しかし乍ら親族関係を示す語の場合、下位に属しながら GA 形をも有する сынъ, вѣнукъ に対し、NA 形のみを有するものは зять, шюринъ, сыновъць の如く、比較的血縁の薄いものに限られていることから、価値観を導入して、NA 形をとるものは、「親族関係において重要性の低い続柄を指す名詞」と規定した方がよいように思われる。

同様にしてクズネツォフの定式も、「社会的に身分或いは重要性の低い人物を表わす語に NA 形が現われ易い」と修正す可きである。クズネツォフはこの語群に関連してメイエを引用し、ギリシャ語原典を訳出するに際して、古代スラヴ語では、冠詞を伴わない形を NA 形によって、冠詞を伴う形を GA 形で対応させていると述べ、これを определенность と неопределенность の相違であると説明するが、これまで述べて来たことからすれば、これは実は個別性と非個別性、具体と抽象の差であるとせねばならないであろう。

代名詞の場合も、このような規範によって矛盾なく説明されると思われるが、3人称代名詞の NA 形が、遺体 (§ 34)、敵対する人物 (§ 34) を指す場合、集団が個人に対する場合 (§ 34)、等に使用されていることから見れば、代名詞の使用そのものが、余り個性の高く

ない人物に限られていたという印象を受ける。

3人称代名詞に GA 形が拡大することが比較的遅い (§ 32) という理由は、このような事情によるものであったと観る可きであろう。

これに反して1・2人称代名詞は、普通名詞よりも遥かに早く、GA 形をとるようになるが、これは、この代名詞が話者及び聴者の何れかを指示し、従って普通名詞よりも遥かに現実性の度合が高く、具体的であったためであろう。

集合数 e (§ 36)、及び形容詞の不一致 (§ 38) の場合も NA 形をとる指人名詞が、中性単数形を以て修飾し得るほどに没個性的なものであったことを示すものに外ならないと考えられる。

§40 最後に、GA 形と NA 形の職能をこのように考えることによって、活動体と不活動体という範疇の形態的特徴が、何故特に対格に現われねばならなかったかについても、一応の説明が可能のように思われる。

対象の有する個別性と聚合性、或いは対象に対する価値の判断というような、極めて感性的な認識は、対象と認識の主体との関係が最も自然であり、最も直接的である場合に、最も容易であると考えられるが、このような条件を満し得るものは、対格においては考えられないからである。

以上の外、最後に残された問題は、何故活動体名詞の対格として生格形を使用するに至ったかを説明することである。メイエは生格形を対格として使用したということを否定して、活動体対格が生格形と同じであるのは単なる偶然であるとみているようであるが³⁹、チェルヌيوفは、生格形が否定生格などに見られるように、統辞論的に対格に極めて近い職能をもっていたためであると主張している⁴⁰。

しかし乍らこの二つの仮説は、何れも、直ちに承認しがたいものを含んでいる。メイエの場合、全く独立に忽然と -a (я) のような形が生じたとは信じられないからであり、一方チェルヌيوفの場合には、活動体・不活動体の区別なく、統辞論的に対格に近い職能をもっていたはずの生格形が、何故後に活動体名詞に限って対格に使用されるに至ったかを説明できないからである。

Я. А. スプリンチャクは、チェルヌيوفの説を一步進めて「生格形を選んだということは、恐らく、共通スラヴ語において生格と対格の職能が極めて似通ったものであったということによって説明されよう。しかし乍ら対象を示す場合、これらの格は相互に異っていた。対格は動詞の行為が完全に及ぼされた対象を示すが、生格は、行為が不完全にしか及ぼされない対象を示していた」⁴¹と主張する。この見解は、生格の意義を考慮に入れたという点で疑いもなく一步を進めたものであると言い得るが、活動体という範疇との関連が

³⁹ A. Meillet, *Le slave commun*, p. 463.

⁴⁰ П. Я. Черных, *op. cit.*, p. 164.

⁴¹ Я. А. Спринчак, *Очерк русского исторического синтаксиса*, Киев 1960, p. 167.

説明できないという点では、チエルヌイフの見解と同断である。私見によればこの種の困難は、これまで述べて来たような生＝対格形の価値を考えに入れば、容易に除去し得るものと思われる。即ち生格の原義を、スプリンチャクに従って行為が不完全にしか及ぼされない対象を示すものとすれば、個別性の高い、従って個性の強烈な活動体名詞は、その個性の故に容易には外部からの行為に影響されないという点で、この生格の職能と共通点を有すると言い得るのである。これに反して個性のさほど強烈でない不活動体名詞は、外部からの行為の全面的な影響下におかれ易いと考えられる。

〔補足〕

この点に関して興味あるのは、スペイン語の場合である。活動体・不活動体の区別がスラヴ語以外にスペイン語及びアルメニア語に見られることは、つとにメイエの指摘するところ (A. Meillet, *Le slave commun*, p. 406) であるが、スペイン語に於いては、動詞の直接目的として立つ場合「先ず人を表わす名詞、次に動物名及び擬人化されたもの」(Real Academia Española, *Grammatica de la Lengua Española*, Madrid 1931, p. 191) は前置詞 *a* をとり、それ以外のものは直接に使用されている。

この前置詞 *a* はラテン語の *ad* に来源を有する (*ibid.*) ものであり、意義的に与格に近い。このことは、行為の対象への及び方が、活動体の場合、不活動体に比べて間接的であるということによって説明されるのではないかと考えられる。もしそうとすれば、このような使用は、発現の仕方こそ異なれ、心の動き方においては、ロシア語の場合と全く同じであると言えるのではあるまいか。このような考え方は慣用的に *a* を伴う対格を要求するか否かによってその意義を異にする一群の動詞の存在によって裏付けられる。例えば *perder a un niño* 「子供を台なしにする」: *perder un niño* 「子供を失う」(秦隆昌「セルバンテスのドン・キホーテ(正篇)より見たスペイン語の名詞・代名詞の与格について」京大言語学卒業論文 昭和34年 40頁(未公刊))の場合、行為が直接かつ完全に対象に及ぼされたか否かが意義的分化をもたらしたと考えられるのである。同様に *querer a* 「愛する」: *querer* 「さがす」: *robar a* 「人からはぎとる」: *robar* 「人をさらう」 etc.

その他この区別が先ず人名を表わす固有名詞から行われはじめ、次いで人を表わす普通名詞、動物名に及んだこと、及び、例えば *aquardar un criado* 「誰でもよい一人の下男を待つ」に対し、*aquadar a un criado* 「或る特定の下男を待つ」(秦隆昌 *op. cit.*, p. 38) のように定性と不定性の区別とも関連していることなども、ロシア語の場合と酷似している。伝統的なスペイン文法は、このような点から *a* を伴う対格と *a* を伴わない対格の使用を定性・不定性のカテゴリーと、「人間性」のカテゴリーとから二元的に説明しようとしているようである (Andres Bello-Rufino J Cuervo, *Grammatica de la Lengua Castellana*, 5 ed., Buenos Aires 1958, p. 281 et seq.) が、アルメニア語においても、人を表わす目的語の場合にはこれに定助辞 *t, s, n* を加える (И. К. Кусикьян, *Очерки исторического синтаксиса литературного армянского языка*, АН СССР, М. 1959, p. 47) とい

うところから見れば、この二つのカテゴリー及びこの区別が対格に現われること、の間には、単なる偶然以上の、内在的関連があると考えざるを得ないであろう。ロシア語についての仮説の傍証として役立てばと思う⁴²。

⁴² この項については京大言語学教室秦隆昌氏の全面的な協力と教示を得た。ここにあつく御礼申上げる。